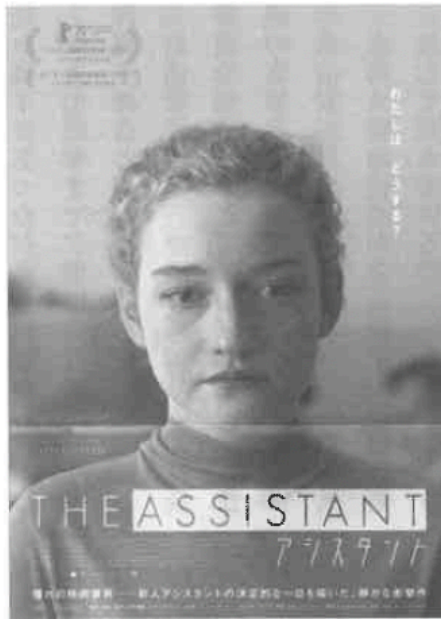


アシスタント
(米・2019)



どんな起承転結が待ち受けているのか。劇場内で上映開始を待つ間、こうした期待が必ずぶくらむ。しかし、この期待は本作では見事に裏切られる。なんの盛り上がりもない単調な映画だな、とみおえた私は物足りなさを感じた。だがしばらくして、これこそが本作のテーマだったことに気づいた。起承転結があつては、実話の集積に基づく本作は成り立たないからだ。

実は彼女は週末も仕事に追われていた。驚いたことに、ジェーンは同僚たちから名前と呼ばれない。「ヘイ！」と声をかけられるか紙つぶてを投げつけられて、ジェーンは視線をその同僚に向ける。名前すらない軽い存在なのだ。仕事は雑用ばかりだ。会長の急な予定の変更で、予約していたフライトやホテルの手配をあちこちに電話してやり直す。ある同僚の妻から「夫を出せ」と電話がかかってくる。彼は不倫にかかわる嫌な内容とわかつてるので、無視してジェーンに面倒な応対をさせる。たまらずジェーンは母親に電話する。事情を知らない母親との会話ははずまない。

と言われたと説明する。しかも当面の住まいに高級ホテルまであてがわれていた。会長が「昼下りの情事」を愉しむためののだ。会長の公私混同のやりたい放題に怒り心頭のジェーンは、会社の内部通報窓口を訪ねる。担当者は迷惑そうにジェーンの告発をきいて、事を荒立てない方が身のためだとジェーンに因果を含める。なおも不満そうなジェーンに「君は大丈夫だ。会長のタイプじゃない」と追い打ちをかける。自席に戻るとすぐに電話が鳴る。会長からだった。「反省文を書け」と怒鳴られる。「二度と失望させません」との謝罪の定番メールを、ジェーンは憤懣を押し殺して送る。

月曜日のまだ暗い早朝、主人公のジェーン(ジェリア・ガーナー)が出勤する。名門ノースウエスタン大学を卒業した彼女は、あこがれの映画業界に入って五週間の新人アシスタントである。外が明るくなったころ先輩社員たちがオフイスにそろいはじめ。ジェーンは「週末は楽しかった？」と水を向ける。「ああ、とても」などという返事に、ジェーンの表情は浮かぬ。

いた。会長は自室で何をしているのだ。その後、落とし主が来社。ジェーンは彼女にイアリングをにこりともせず返す。本作ではずっとそうだった新人が来ているという。初耳のジェーンは周囲に尋ねると、会長がアイダホに出張したとき気に入ったウエートレスだという。ジェーンが受付にいくと、彼女は会長にきょうから働ける

夜食をレンジでチンして食べようとしたとき、会長から「もう帰っていい」と電話がやっとなる。ジェーンは夜食をゴミ箱に捨てて(食べ物を粗末にするな!)家路につく。その途中、遅い夕食をとりながら父親に電話する。多忙のあまりおとこの父親の誕生日を忘れていたのだ。父親は上機嫌で「お前には期待しているよ」と言う。こんな残酷な言葉があるうか。映画業界の最底辺を支えるアシスタントの一日がこうして終わる。

(二〇二三年七月七日・シネマカリテ)
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)